

## 自分史分析の一考察 (Ⅲ) —自分と向き合うこととナラティブプラクティス—

杉原 俊二

### A study of Life History Analysis (3) : Life History and Narrative Practice

Syunji SUGIHARA

#### 要 旨

筆者はクライアントの自分史を分析することで、援助する方法の検討を進めている。そして、最近では、クライアントが自分の歴史を自分自身で語り、それを筆者がまとめ、クライアントと一緒に分析するという自分史分析の方法を進めている。本論文では自分史分析の1つのケースを取り上げて分析をした。このケースでは、自分史分析をおこなうと、自分の過去を「物語」として整理ができた。そして、クライアントはその後に自分の生き方を変えている。自分史分析はスーパービジョンの技法として有効であることが確認できた。

#### Abstract

The author studies of the method by analyzing history of own of person. Client tells your history by yourself, and the author gathers it up. And the author analyzes it with client together. Author took up one case of Life history analysis in this thesis and analyzed it. There was rearranging as “a story” by the past of oneself when Author and client did Life history analysis. And client changes a way of live of oneself in the sequel. The Life History Analysis was able to identify that author was effective as technique of a supervision.

**Key words :** Life History Analysis Analysis of half life Self analysis Narrative Practice

**キーワード :** 自分史分析 半生分析 自己分析 ナラティブプラクティス

#### I. はじめに (問題と目的)

防止のための研究を進めているうちに、スーパービジョンの重要性に気づき、そのうちのセルフケアの技法として進めるためであった (杉原: 2005b, c, f, g)。しかし、最初には自分史を活用したセルフケ

#### (1) 発 端

自分史分析を始めたのは、援助職のバーンアウト

アをどのように進めてよいものか手探り状態であった。たまたま、友人である医師のAさんが自分の経験を話してくれ、それを自分史分析として検討をした（杉原：2002, 2003, 2005b）。

そのAさんから、中学・高校の同級生で同じく医師をしているFさんを紹介された（注1）。Aさんから聞くFさんの話は面白いものであった。

一人の自分史を延々と取り上げることは是非は今後討議するとして、Fさんとのインタビューを8回にわたり報告書（研究ノート）という形で報告した（杉原：2005a, d, e, h, i, j, 2006a, b）。Aさんの自分史もおもしろかったが、筆者としてはよく知っている人であったためか、論文にするさいに筆者が知っているエピソードを意図的にはずしている傾向があった。しかしFさんについては、ほとんど知らなかったので、多くのエピソードを報告書に盛り込んだ。

ただし、インタビューをその都度まとめていたという時間的な関係もあり、全体を見渡す作業をしていないので、今回はその8回の報告をベースに全体を振り返り、考察を加える。

（注1）Aさんという呼び名は「自分史分析の一考察（Ⅰ）」（2005b）からのものであった。Fさんというのもイニシャルではなく、「一考察」で取り上げる6人目の事例という意味である。なお、事例を取り扱っている「自分史分析の研究」では対象者を一人称で、それらをまとめた「一考察」では三人称で表記している。

## （2）Fさんの経歴

Fさんは東京大学の文系学部を卒業後、別の国立大学医学部医学科へ入学し、医師となった。東大から別の大学医学部を経て医師となった人は少なくはない。筆者が知っているだけでも10名を越える。

ただ、Fさんは自分の著作の著者紹介で東京大学卒業であることを書かない。ある著作には「1963年

横浜生まれ。〇〇大学医学部卒業」と書いてあるだけである。また、研究論文以外の著作についてはそのほとんどをペンネームで書いている。「香山リカ」のように、いかにもペンネームという人はわかりやすいが、Fさんの場合は一般の名前と区別のつかないペンネームを用いている。ちなみに文体も若干変えてあり、同一人物の文章かどうかは、教えてもらうまで筆者にはわからなかった。

東大卒であることを公言せず、また自分の名前も最小限しか出さない人とはどのような人であるのか。多少の興味を持ってAさんに紹介してもらうことにしたのである。

Fさんの経歴を簡単にまとめると以下ようになる。

- 1963年 横浜市生まれ。
- 1968年 私立幼稚園入園
- 1970年 同一法人の私立小学校へ入学（進学）。
- 1974年 父親の転勤に伴い地方都市へ移り、地元の公立小学校へ転校（小学5年生）。
- 1976年 国立大学附属中学校へ入学。
- 1982年 国立大学附属高等学校を卒業。東京大学教養学部理科Ⅱ類へ入学。
- 1984年 東京大学文系学部へ進級。
- 1986年 国立大学医学部医学科入学。
- 1992年 国立大学医学部医学科卒業。医師国家試験合格。卒業した大学とは別大学医学部の臨床医学講座へ入局。主任教授の紹介で関東地方の田舎にある精神科病院（I病院）へ研修医として就職。
- 1994年 都内にある精神科病院（J病院）へ移る。
- 1999年 博士（医学）取得。
- 2000年 カナダへ留学（約14ヶ月）。
- 2001年 帰国。しばらくI病院で非常勤医として勤務。
- 2002年 現在の病院（K病院）へ精神科部長として

移る。(現在に至る)

## Ⅱ. 事 例

### 1. 幼少期から小学校時代

#### (1) Fさんの家族

Fさんは横浜市にある高級住宅街で生まれ育った。父は一流企業の技術職（エンジニア）であり、母は専業主婦であった。4人きょうだいで、二人の異母兄と4歳年下の妹がいる。

自宅の敷地が300坪ほどあり、雪の日に庭でスキーをした経験があるそうだ。近所には仲の良い同じ年の友人もいたが、(Fさんの表現を使えば「気持ち悪いほど」)上品な人が住んでいる町であった。

Fさんの父は旧財閥の一族の血縁であり東京帝国大学を卒業後、財閥系列の会社に就職していた。ただ、直系の一族ではないため能力以外の問題で、思いうような出世はできなかったようである。(Fさんの表現に従えば)「兄たちの母親」は旧家の出身であり、その一族には国務大臣を務めた政治家もいる。「兄たちの母親」は長兄が10歳、次兄が6歳の時に病死した。父はその3年後にFさんの母と再婚した。

Fさんの母は地方の地主の長女であり、父とは見合い結婚である。母は地元の公立高校を卒業後、東京の女子大学で学び、結婚するまでは母親の父親(つまりFさんの祖父)が経営する会社で働いていた。

その結婚の翌年にFさんは誕生した。Fさんは自宅の近所にある私立幼稚園、小学校へ進んだ。異母兄は2人とも進学に熱心な幼稚園・小学校へ入学していたが、Fさんと妹は母の意見もあり、自宅の近所にあるキリスト教の学校へ入れられた。母は特に洗礼を受けたクリスチャンではなかったが、その学校の隣にある教会へ日曜日には通っていた。今思え

ば旧家に嫁いだために大変なことが多く、いろいろと考えることもあったのであろう。

#### (2) 地方への転居

Fさんが小学4年のときに、父は会社が西日本に新しく作った事業所の技術責任者として転勤することになった。この時、長兄は東京大学法学部を卒業して就職し、一人暮らしをしており、次兄は大学へ入学したばかりで、東京大学教養学部(駒場キャンパス)へ自宅から通っていた。

父は当初、単身赴任をしていた。月に一度は横浜に帰ってきたが、相当寂しかったようであった。父の赴任の翌年、Fさんは母、妹とともに引越しをすることになった。

西日本にある事業所は大規模であり、転校した小学校の児童の多くはその事業所か関連会社に勤務する人の子弟であった。その小学校は新しくできた高級住宅地(団地でない方)に新設されたばかりであり、地元の言葉でなく横浜や東京の言葉があふれていた。そして(公立とは思えないほど)学力レベルの高い小学校であった。

Fさんは母の考えもありそれほど進学熱心でない私立の小学校に通っていたいが、転校した小学校の同級生たちは向上心が高い人が多く、東京にある有名私立中学校(寮に入るのであろう)か、地元にある国立大学附属中学校への進学を希望する人が多くいた。

Fさんは本来の学力は高いため、小学校の担任の勧めもあり進学塾へ通い始めた。後に中学・高校と同級生であり、現在に至るまで友人であるAさんとは、その塾の模擬試験で一緒になった。Fさんにとって地元の方言を話す最初の友人が、Aさんであったそうである。

## 2. 中学進学と高校時代

### (1) 中学進学

中学受験ではその小学校の同級生と同様に、東京の私立中学校と地元の国立大学附属中学校を受験した。これは国立大学附属中学校が独特の選抜方式をとっており、学力試験に合格した人の中から「くじ」で入学者を選ぶからである。もし「くじ」が外れた場合は、合格した東京の中学校へ進学するつもりであった。

幸い、「くじ」にも当たり、附属中学校へ入学した。Aさんも同じく入学できた。Aさんとは、中1、2年と高2、3年（附属では5年6年と呼んでいる）が同じクラスであった。Fさんは、部活についてはいろいろな事情があり、中学校が文化部（放送部）、高校が硬式野球部であった。ちなみに、Aさんは小学生の時はサッカーをしていたが、中学に入ると陸上競技部に入部し、主に短距離走をやっていた。

### (2) 不思議な野球人生

Aさんはサッカーから陸上競技に移ったが、Fさんは小学校から高校までずっと野球をしていたそうである。ただし、横浜にいた頃は硬式を使用するリトルリーグに入っていたので、地元の軟式野球の少年野球チームには入らず、父の勤務する会社の人たちを中心とした社会人のクラブチームに入れてもらって練習をしていた。

そのクラブチームは（父の勤務する）会社の野球部とは違い、専用の練習場もなく、主な練習場所は出入りの建設の業者が自分たちのレクリエーションのために造った球場を時間借りしたものであった。そのグラウンドは、ほぼ真四角の土地にフェンスを巡らし、バックネットとバックスクリーンを取り付けた簡単なものであった。しかし、その後、ある私立高等学校の野球部専用球場になったので、それなりにしっかりとしたつくりのグラウンドであったよう

だ。

クラブチームの中心選手は高校や大学で硬式野球をしていた人であり、甲子園出場経験者や社会人野球を若くして辞めた人もいたので、遊びとはいえ本格的であった。試合もプロ野球並みの試合数を誇り、公式戦と練習試合をあわせて年間130試合以上を目標におこなっていたそうである。年間の土日をあわせても100試合もできないだろうと思っていたら、3月から11月までの土日でダブルヘッダー（1日2試合）は当たり前で、トリプルヘッダー（3試合）も時々あったそう。エースの投手はどれか1試合には先発し、ストッパー（クローザー）の投手は1日2試合に投げることもあったそうである。

Fさんは小学5年から中学3年までの5年間、そのような野球の大好きな大人に混じって硬式野球をやっていた。年齢の関係で選手としての登録ができないため公式戦は一度も出場できなかったが、練習試合には出場させてもらっていたし、トリプルヘッダーの時には投手もさせてもらえた。中学3年の時には地元のクラブチームとの対戦で初めて先発をさせてもらい勝ち投手にもなったそうである。相手のチームはFさんが中学生であることは最後まで気がつかなかったそうである。

Fさんは小学5年から中学受験準備ために進学塾へ通っていたが、平日のクラスと土日のクラスのうち、平日のクラスを選んでいた。それは、土日に野球の練習（と試合）をするためであった。

### (3) 高校進学後に野球部に入部

Fさんは中学の3年間は部活をほとんどしていなかった。学校では文化部（放送部）に入っていたが、ほとんど幽霊部員であったそう。その代わり、個人でのトレーニングは欠かさず、冬場にはAさんたち陸上競技部に混じって体育館でのトレーニングに励んでいたそうである。他の生徒たちからは「変人」だと思われていた。

中高一貫の高校に進学（進級）すると、Fさんは硬式野球部に入部した。地元の中学校は軟式野球だけであり、中学の公式戦が終わると、その学校では受験がないため高校の野球部で練習を始める。中学の野球部員の中には、高校に進む時に練習がきつい硬式野球を避けて、軟式野球部の練習にいく生徒が多かった。そのため、硬式野球部はいつもぎりぎりの人数でやっていた。

Fさんは入部すると、すぐにエースとなった。そして、1年の秋には4番打者になった。主将はキャッチャーをしている同級生が引き受けてくれたが、チームの大黒柱であった。ただ大学受験があるため、例年ほとんどの部員は2年の夏で部活を引退する。Fさんの学年はバッテリーが揃って引退をしなかったため、多くの3年生が残り7月の甲子園予選まで戦った。1日1時間半、週5日の練習時間ではあったが、できる範囲のことをやった満足感があった。

### 3. 大学入試と大学進学

#### (1) 大学入試

Fさんは大学入試については、ほとんど迷いがなく東大一本であった。ただし、医学部への思いはあったもの、医学部進学のための理科Ⅲ類には成績が届かなかった。少しの可能性がある理科Ⅱ類（希望者の上位10名が医学科に進学できる）を受験し、見事合格した。

Aさんのほうは大学に関してはかなり悩み、結局、クラス担任の勧める地方国立大学医学部へ進学した。結果としてFさんよりは4年早く医師になることができた（Fさんは筆者の書いた論文を読むまではAさんが医師の仕事に迷いを感じていたことを、はっきりとは知らなかった）。

#### (2) 東大在学中の大学入試受験勉強

東大受験までは「迷いなし」であったが、東大入

学後は「迷いっぱなし」であった。医師になりたい気持ちが強くなりすぎ、他の事に手がつかない時期もあった。大学への出席は最小限にとどめ、大学1年の途中から、予備校で模擬試験を受けたりした。結局、教養学部から学部への進学時に、医学部医学科へ行くことはなかった。同じ医学部の保健学科や、薬学部、農学部獣医学科などへの進路も検討した。しかし、医学部医学科へ進めなかったから、そちらにいくということが我慢ならずに、いろいろと迷った挙句、文系の学部を選択した。

大学3年になると大学受験勉強と学部の勉強を平行して行い、3年生で卒業に必要な単位をほとんど履修した後に、予備校に通い始めた。

第一志望は大阪大学医学部の3年次編入学であったが、これは不合格であり、卒業した年に、関東地方にある国立大学医学部（医学科）への合格が決まった。

Fさんは東大にいる4年間は特定のクラブ活動をせず、アルバイトもしていなかった。たまに硬式野球をして遊ぶ程度であった。

### 4. 医 学 生

#### (1) 医学生時代の病院心理職

再度の大学生活（医学生生活）では、東大時代と一転してアルバイト主体の生活であった。

東大理科Ⅱ類を出ているので、その大学での教養科目のほとんどが認定か免除されたためであった。Fさんが選んだアルバイトは、同じく東大からその医学部に進学した先輩が譲ってくれた病院での心理職（心理テスター）の仕事であった。ただし、Fさんは心理テストについて施行方法をほとんど知らなかったため、必死になって現場で覚えた。

その医学部は3年次から忙しくなる。先輩も3年生に進級する際にアルバイトを譲ってくれた。Fさんも2年生までで辞めるつもりであった。しかし、医学部2年生の終わりごろから始めた心理相談（カ

ウンセリング）がおもしろくなり、その後も時間をやりくりして続いていた。人の相談に乗っているうちに、自分のことが客観的に見えてきたのであろうか。だんだんとFさんの人生に対する考え方が、変化してきた（筆者の考えによれば、この時がFさんの人生の転機であったように思える）。

Fさんは医師になれば、必要がなくなるかもしれない「臨床心理士」の資格を取得することにした。相当に忙しい医学生としての学校生活の中で、3年生以降も病院心理職のアルバイトをほぼ週3日続けた。主な面接時間は平日の夕方以降と土曜日であったが、実習などの忙しい合間を縫いアルバイトを続け、医学部6年の時に臨床心理士の資格を取得した。

## (2) 父の死

医学部への進学は、異母兄である長兄は冷ややかに見ていたが、他の家族は温かく見守ってくれた。仕送りはそれまでどおり月10万円であったが、それまでと違い家賃を自分で負担することになった。東京の本郷にある学生としては高級な賃貸マンションから、医学部とアルバイト先の病院の間にある家賃3万7千円の安アパートに転居した。

医学生2年になったばかりの頃に（妹は大学2年）、Fさんの父は亡くなった。突然死（心不全）であった。当時は、大企業の子会社の社長に在職中で、65歳であった。

5年前に父は最初の定年になったので、子会社の社長として横浜の地に戻ってきた。妹がちょうど高校へ進学するときであった。子会社とはいえ在職中に亡くなったため、元々いた会社も含めて盛大な葬儀が営まれた。

その後も仕送りは減らされることはなかった。

妹は実家から東京にある私立大学に通い、その後就職した。妹が実家にいる間は、母と一緒に住んでいた。妹が結婚で実家を離れることになった時、母

は実家を出て地方の生家に戻るようになった。生家には母の両親はすでに亡くなっておらず、弟たち（Fさんの叔父）も東京に出ているため、すぐ下の妹（Fさんの叔母）が一人で住んでいた。

## (3) 学生結婚

筆者の報告書では、Fさんの恋愛や結婚についてほとんど触れていない。Fさんは医学部6年の12月に現在の奥さんと入籍した。奥さんは妊娠しており、翌年出産した。

医学部3年から、当時東京で雑誌の編集をしていた2歳年上の「バリバリのキャリアウーマン」（奥さん）と付き合い始め、翌年には奥さんの住むマンションに転がり込む形で、同棲を始めた。本人たちは結婚をしたつもりであったから、籍を入れたのは「法的に夫婦になった」ことを意味していた。結婚式はしなかったが、挨拶状だけは親しい人たちに送った。

ちなみに、その3ヵ月後にAさんの結婚式があったが、Fさんは国家試験直前のため、招待状を受け取ったものの、どうしても出席できなかったそうである。

## 5. 研修医とその後の医業

### (1) 入局と研修

医学部へ入学した当時は、東大医学部の臨床医学の講座へ入局するつもりであった。しかし、カウンセリングを続けているうちに、東大にこだわるものがなくなり、結局入局したのは、別の国立大学医学部の入院施設を持たない精神医学系臨床医学講座であった。

その講座のボスである教授は、その分野の第一人者であり、ユニークな経歴を持つFさんを歓迎してくれた。医師国家試験に合格すると、とりあえず医師として研修をする必要があった。

入院施設を持たないため、5月一杯まで外来を手

伝っていたが、6月から他の病院へ研修に行くことになった。医学生の際にアルバイトをしていた病院の院長からは熱心に誘われたが、教授からは関東地方のはずれにあるI病院に行くように指示された。

当時住んでいたマンションから遠いこともあり、また、奥さんは出産を控えていたので、そのマンションをひきはらった。奥さんは八王子郊外の実家に戻り、FさんはI病院のそばに単身者用のアパートを借りた。1年間だけの赴任のつもりであった。

## (2) 別居生活

最初は1年の約束であったI病院での勤務も、後任が来ないため半年ずつ延長されて、結局は2年間になった。旧態依然とした病院や生まれて初めての田舎暮らしにへきへきする事もあったが、所属講座出身の先輩がオーベン（指導医）であり、雇われ院長との仲も良好で、そのまま勤務を続けてもよいとも思っていた。

第一子（長男）の出産にも立会い、毎週までとは行かないが八王子郊外の奥さんの実家へ週末は顔を出していた。このころになるとバブル経済が崩壊し、出版業界も不況になった。奥さんが担当していた雑誌も休刊（事実上の廃刊）となり、編集部は解散していた。（産休に続いて）育児休暇をとっていたが、復職するか退職をするかを決めかねていた。

FさんはI病院の次は都心の病院に移るはずであったので、奥さんは都内の賃貸マンションに移った。半年後、Fさんも都内にあるJ病院に移り、親子水いらず生活を始めた。しかし、奥さんはしばらくすると「育児ノイローゼ」になり、結局、長男を連れて八王子郊外の実家に戻るようになった。94年の初夏の頃であった。Fさんはそのマンションに2ヶ月も住まないうちに転居することになり、所属講座のある大学とJ病院の間にある単身者用のワンルームマンションに引っ越した。

## (3) 長期化する別居生活

奥さんの実家は資産家であったので、実家の敷地内に家を建て、そこに娘と孫を住ませた。Fさんの一族の風習としてはそのようにずるずると養子になるようなことは好まれなかったが、厳しい父は亡くなり、後妻の子どもということもあったので、異母兄である長兄がぶつぶつと言っていただけであった。

Fさん一家は八王子郊外と都心の二重生活になった。95年になると地下鉄サリン事件があり、Fさんが普段利用していた地下鉄でもサリンが撒かれ、大パニックになっていた。幸いFさん自身には何もなかったが、その後の長い戦いの序章であった。容疑者の精神鑑定などに駆り出されることになったからである。

94年から勤め始めたJ病院の勤務以外に所属講座の教室員としての仕事も増え、八王子郊外の「自宅」に戻ることはほとんどなくなった。逆に週1回、仕事を兼ねて奥さんが通勤用のマンションにやってくるようになった。奥さんはフリーのエディターとして働いていたが、それだと週に3～4日は都心の編集プロダクションに顔を出さなくてはならないため、（Fさんが知らないうちに）少しずつ文章を書き始めライターとして自立していた。

## 6. J病院勤務と博士号

### (1) J病院で専門分野を見つける

Fさんが勤務するJ病院は、研修医をしていたI病院と違い、多様な精神障害者の方が外来を訪れて、また入院していた。

I病院では慢性の統合失調症と高齢者の認知症が多く、Fさんは精神科医としての研修以外に内科的診断から簡単な外科的処置に至るまで覚えていった。しかし、時間的な余裕は多く、じっくりと学ぶことができた。

一方、J病院は都内の病院で規模も大きい

様々な精神症状を呈する人がいた。I 病院になかったものとして思春期の病棟があり、I 病院では体験できなかった分野であったので、志願してこの病棟に配属になった。ここで見聞きし治療経験を積んだことが、その後に研究論文や著作につながっている。

## (2) 博士号の取得

F さんの所属講座では若手は大学院生（博士課程）か、研究生（非常勤医）か、どちらかの形で所属をする。博士号は博士課程では 4 年目、研究生では 6 年目以降に学位論文を提出することができる。F さんは研究生になり、研究生としての学費を納め、雀の涙ほどの賃金を大学からもらっていた。F さんの場合は 97 年度に学位論文を提出することができ、98 年 3 月に医学博士号を取ることが可能であった。

たいした研究もせず学位論文を書く人もいたが、F さんは努力して、他の学位でも恥ずかしくないような論文を書いている。ただし、そのために提出が 1 年ほど延びてしまった。99 年 3 月に医学博士号を取得している。

## 7. カナダ留学

### (1) 精神科医長になる

F さんは 99 年に 35 歳で博士号を取得してから、J 病院の精神科医長となった。J 病院は精神科病床のみを有する単科で 500 床以上の病床を有する大規模病院であり、診察科には内科と歯科があるもののそのほとんどは精神科医であった。そして、精神科の場合には他科や他の職業からの転向組も多いため、年齢に関係なく医師としての経歴から「研修医」「医員」「医長」「部長（科長）」「医局長（内科を含めた全体の長）」「副院長」「院長」の役職があった。院長と、二人いる副院長の一人は経営者一族が就いており、他の勤務医は副院長を筆頭に医長まで

が「管理職」である。

F さんの場合、J 病院での勤務 5 年目、医師になって 7 年目で医長になったのは早い出世であったそうである。とはいえ、経営会議に出席するのは部長以上であり、医師としての勤務では研修医のオーベン（指導医）に正式になることが、大きな変化であった。それまではミッテン（中間指導医）とって、実質的な指導をするものの責任者ではなかった。

東大を卒業して 12 年が経ち、医学部に通いながらのアルバイト勤務から、I 病院での研修医、J 病院での勤務医と休むまもなく仕事をし続けた。そして、医師になってからも指定医（精神保健指定医）、博士号と休むまもなく研修や研究を続けた。そろそろ別の生き方をしてもいいのではないかと F さんは漠然と考えはじめていた。

### (2) 国際会議で留学の決意

ちょうどその頃（99 年夏）に東京で F さんが専門とする分野の国際学会が国内の学会と併せて開催され、F さんの所属講座も運営委員会の一部を担い、F さんは招待されたゲストスピーカーの接待を任されたそうである。F さんは英語のリーディングやライティング（読み書き）は不自由しないものの、スピーキングやリスニング（会話能力）にかなりの問題があったので、こっそりと A さんを招いて手伝ってもらったそうである。A さんは高校の時から F さんよりも英語の成績はよかったそうであるが、留学経験もあり、短大で英語を教えていただけあって、さらにブラッシュアップされていた。A さんには少しでも手伝ってもらい、後は東京で遊んで帰ってもらうつもりが、接待では大活躍をしてくれ、大助かりであったそうである。

その国際学会での接待の経験から「海外留学」を真剣に考え始めた。そして、ゲストスピーカーであるカナダの X 大学の大学の大物教授と一緒に来日した同じ

大学の準教授に電子メールでコンタクトを取った。

X大学では、いくつかの受け入れ方法があるが、日本の研究者は、フェロー（研究員）として受け入れられるケースが多いことがわかった。J病院には、サンフランシスコに留学経験のある医師がいた。彼と雑談をしているとき、留学の話としたところ奨学金の話が出た。Fさんは私費で行くつもりであったが、いくつかの奨学金があり、どれかに当たればかなりの経費を負担してもらえることがわかった。その医師は若い頃に留学したためにお金がなく、いろいろと探し回った経験があった。

インターネットでいろいろと調べているうちに幾つかの候補が見つかった。詳細を調べて義務の多いものを避けていると、9ヶ月間の滞在費と旅費を負担してくれる奨学金があることがわかった。早速連絡をすると、TOFELを受験してくれといわれた。ほとんど受験勉強をせずに受験したが、そこそこの点数が取れた。すると、受け入れ先が明確であれば面接をしてくれることになった。メールのやり取りをコピーしてその事務所へ行き非公式の面接を受けた。

### (3) 奨学金と留学

奨学金の非公式の面接では東大卒という点が役に立ったそうである。というのは、Fさんの専門分野は純粋な医学だけでなく人文・社会科学との学際的な分野であり、医学部に進む前に文系の学問を修めた点が評価されたからである。また、その奨学金を出す財団の幹部がFさんの東大での先輩（同じ学部）に当たることもあって興味を持ってもらえた点も見逃すことはできなかった。

正式な面接も無事終え、300万円に及ぶ奨学金を受けることができた（給費と貸与の組み合わせ）。

2000年5月末でJ病院を退職し、6月には成田からバンクーバー往きの飛行機に乗った。Fさんにとっては生まれて初めての海外旅行である。バン

クーバーでカナダへ入国して、国内便で留学先の都市へ行くのであるが、その時はたまたま飛行機の席が隣になったUBC（ブリティッシュコロンビア大学）へ留学している日本人女性に助けられた。

留学先の空港には、あらかじめ知らせておいたので受け入れ先の準教授本人が迎えに来てくれた。その日は彼の自宅に招待してくれ、翌日から近くの長期滞在用のアパートに移った。

## 8. 留学以後

### (1) 帰国

9月から5月までの留学の後も、しばらく滞在を続けた。9月中旬に帰国する予定であったが、「9.11」の影響もあり、日本に帰ることができたのは10月を回っていた。都内のマンションはカナダへ行く前に引き払っていたので、とりあえずは妻と二人の子どもが住んでいる東京八王子郊外へ戻り、数日休んだ後に就職活動を始めることにした。

まずは所属講座に顔を出し、教授に帰国の挨拶と後期の授業担当を確認した後に同僚たちといろいろな話をしていると、講座の先輩で同じ非常勤講師をしている医師が現れた。彼はFさんが最初に研修に出たI病院の管理職として勤務しており、I病院では「1名の常勤医師が突然辞めて、今は、二つの医学部においてアルバイト医師をまわしてもらってやりくりをしている。多少遠いけれども来てほしい」という話になった。

奥さんとも話し合い、次の就職先が見つかるまではI病院でお世話になることになった。月曜日に出勤して夜勤をはさんで火曜日まで勤務。水曜日を休み、また木曜日に出勤して夜勤をはさんで金曜日まで勤務するという勤務体系を翌年3月まで続けた。週2日の外来もあるが、サテライト診療所へ行く必要もなく、山間の病院で給料は安いものの比較的のんびりとした勤務であった。医師になって初めて年末年始を自宅で迎え正月をゆっくりと過ごすことが

できた。

## (2) K病院へ

八王子郊外の自宅からI病院までは車で片道2時間弱。「田舎から田舎」であるのでほとんど渋滞もなく、楽しい通勤であった。大学の所属講座に顔を出すのは水曜日であり、自宅にいたのは週末だけであった。給料は（医師としては）多くないが、結構楽しい生活であり、このまま正式にI病院に就職しようか、と考えているときにK病院から声がかかった。

K病院は小規模の精神科病院であり、創業者の一族である院長は厳しくなる医療経営環境の中にあってK病院の経営についていろいろと考えていた。そして、その改革の一部をカナダで研鑽を積んだFさんに託そうと考えたのであった。Fさんに対しては精神科部長のポストを用意していた。これは院長、副院長に続くナンバー3のポジションであり、経営陣の一人であった。

02年1月から、週1日の非常勤医として勤務を始め、様子を見た。正式に就任の返事をしたのは2月に入ってからであり、4月から精神科部長としての仕事を始めた。K病院は常勤医が少なく、大半を慶応系の複数の私立大学医学部からのアルバイトでまかなっていた。まずはそれを改革し、一人の指定医を持つ医師と、他科から移ってきた研修医を引っ張ってきた。そして、出費の多い医師の数を最小限にしながら、パラメディカルを増やした。カナダ流の在宅医療へと移していったのである。

急激な変化は、K病院に多少の軋轢を生んだ。慶応系のある医学部からは医師の派遣が無くなった。また、看護師の数名も病院を去った。しかし、地域の医師や社会福祉関係者との風通しがよくなり、多少の応援もあった。現在は4年目であるがK病院はすっかり変化し、地域の中で信頼される医療機関となっている。

## (3) 家族関係

最後に家族の関係をまとめる。

カナダから帰国後、I病院へ勤務しているときは、八王子郊外の自宅から通っていた。仕事の都合でI病院の宿直室、所属講座での仕事があるときは都内のホテルに宿泊し、自宅にいたときは週末ぐらいであったが。

K病院に正式に就職してからは、K病院が用意してくれた都内のマンションに一人で暮らし、週末に自宅に帰っている。金曜日の夜に自宅に帰宅し、月曜日の朝に八王子郊外から出てくる。鉄道とバスで片道2時間以上もかかるが、それも結構楽しみである。

子どもたちも長男は（05年には）中学生に、長女も小学生の上級生になった。二人とも奥さんの希望通り、自宅の近所にある小規模の私立小学校へ通い、長男は比較的ゆとりを持って教育するといわれている私立の中学校へ進んだ。

週末は奥さんの実家から借りている小さな農地で、奥さんと二人で農作業をしている。義理の両親はFさんの変化に驚いているが、家族が円満なことに満足しているようである。一時期途絶えていたFさんの母との交流も盛んになった。母の住んでいる家と八王子郊外の家が高速を使えば車で一時間程度であり、家族で出かけることが増えたのである。

妹の家族は、現在、夫の勤務の関係で西日本に住んでいるが、甥や姪が年に一回は遊びに来てくれる。兄たちとは冠婚葬祭以外はほとんど会わないが、一族が多く、冠婚葬祭の回数が年に1～2回はあるので、よく顔を合わす。

長兄は相変わらずまじめであり、次兄はこれもまた相変わらず温和である。長兄の長女（つまり姪）は東大へ進学したが、後の二人は他大学へ進学した。次兄の子どもは二人とも東大以外へ進学している。長兄は二人の子どもの不出来を嘆いていたが、次兄はそんなものだろうという顔を押ししていた。

### Ⅲ. 考 察

#### 1. 東大と医師

##### (1) 東大へのこだわり

東大へのこだわりについて、Fさんは振り返りながら二つのことを自己分析していた。一つは、Fさんの父系一族の男性はほとんどが東大卒であることである。父の男性の同胞は6人いたが、地方の医科大学を卒業して医師になった一人を除いて5人が東大卒であった。Fさんも振り返って冷静に見てみると、旧財閥の本家のほうは意外と慶応大学卒業した人も多いのであるが、「分家」のほうは東大卒が圧倒的に多いそうである。

もう一つは、母との関係である。異母兄の二人は文科Ⅰ類から法学部（長兄）と理科Ⅱ類から工学部、修士課程、工学博士（次兄）であった。Fさんの母は進学についてこだわりはないほうであったが、Fさんのほうがむしろ母の立場を気遣った。

Aさんによれば、Fさん（とAさん）の成績は東大理科Ⅱ類を受験するのは、冒険の部類に入ったそうであるが、Fさんは滑り止めで合格していた早稲田大学理工学部に入學する気はさらさらなく、一浪は覚悟の上であったそうである。

##### (2) 東大へ行ったことへの評価

Fさん本人が思っていた以上に、東大へ入学することが目的になっていたため、今度は入学後の勉強に身が入らなくなった。

長兄はもともと一族の会社に入ることを良しとせず、官僚になるつもりであったが、結局は一族の会社に入社した。次兄は一族の会社に入ったものの、同僚たちと独立して自分たちの会社を興した。二人とも東大在学中にやりたいことを見つけていた。

しかし、Fさんは何になりたいのかが分からなくなったそうである。医師になりたいというのは、入学以前からの思いであったのか、Aさんの影響なの

かは今となっては分からない。ただ、今度は東大医学部へ進学することが目的になったのかもしれない、と分析している。

結局、別の国立大学医学部へ進学したのであるが、今となっては東大にいていろいろと悩んだことも、今の仕事にプラスになっていると感じているそうである。

##### (3) 精神科医師のなり方

実家が医業を営んでいない子弟の場合、どのように医師になろうとするのか。

前述のAさんとFさんは中学・高校の同級生であり、高校3年の同じクラスから2人の精神科医（精神保健指定医）が出ているので、比較をする。

先述のように、Aさんは高校を卒業後、地方にある国立大学医学部に進んだ。その後、短大の講師、公衆衛生学教室の大学院生、研修医の3足のわらじをはき2年間を過ごす。研修医としては公衆衛生学教室の教授の紹介で。市中病院の内科で週4日勤務し、重症患者の自主当直以外は夜間の勤務を経験していない。22ヶ月の内科での研修の後に、同じ教授の紹介で精神科病院に勤務し、通算60ヶ月目までは形式上週4日の勤務を続けていた。そして、精神保健指定医となった後は、非常勤医師に転じ、さらに一年後に病院勤務を辞めている。

その後、Aさんは22ヶ月の間「医師を辞めた」状態となり（勤務先の短期大学では健康管理センターの所長として医業にはあたっていた）、その後にクリニックと福祉施設の非常勤医師として医業を再開した。

現在は、四年制大学で教授として授業を担当するかたわら、非常勤医師として勤務を続けている。

Aさんは父親が地方公務員、母親が専業主婦であり、高校のクラス担任から「その大学（医学部）なら、合格するから」という理由で勧められ、医師になってしまった。

Fさんは国立大学附属高等学校を卒業後、東大理Ⅱから「文転」して文系学部へ進み、その後、関東地方の別の国立大学医学部医学科に入学し、医師になった。さらに東大医学部ではなく、別の国立大学医学部の臨床医学講座に入局し、13年目になる医師である。入局直後から精神科のある病院に派遣され、そこで研修を受け、2つ目の病院在籍中に精神保健指定医となり、カナダ留学をはさんで現在3つ目の病院に勤務している「精神科医」である。また、一方で専門分野の著作や論文も多数あり、その分野の少壮の研究者として知られている。

高校3年生のとき、Aさんと同じクラス担任ながら、Fさんに医学部は勧めていない。家庭の事情から、東大へ進学するほうがよいと判断されたのであろうか。

Aさんは医学部在学中から指導を受けていた公衆衛生学の講座の教授から「身体医」として内科での研修をすることを勧められ、それに従っている。精神科に転科したのはAさんの表現に従えば、「身体医としての限界を感じたから」ということになる。

一方、Fさんは医学部在学中にしていた病院心理職のアルバイトで、多くのクライアントの人たちに対してカウンセリングをしたことがきっかけになっている。Fさんの表現に従えば「もっとも社会に接した分野」だからだそうである。医師としては「変わり者」である精神科医（堀池：1993）ではあるが、二人の軌跡は重なり合うものが多くのエピソードに見られる。お互いの影響を見ることができる。

## 2. 家族関係

### (1) Fさんの原家族

Fさんの家族は、父、母、異母兄二人、本人、妹の6人家族である。異母兄とは14歳と11歳離れているため、あまり親しく付き合うことはなかった。幼少の頃、兄と遊ぶことはほとんどなかったようである。Fさんが幼稚園に行く頃には、長兄は大学生、

次兄も高校生であり、友人たちと遊ぶことが多かったようだ。

父は、勤務が相当忙しく、また、Fさんの友人たちの「父の年齢」よりは、「祖父の年齢」の方に近いと、どうしても近寄りがたいところがあった。しかし、兄たちによれば、Fさんに対する父の接し方は兄たちに比べるとはるかに甘く、妹に対しては溺愛に近いものがあったそうである。

地方に引越しをしてから、父は随分と優しくなり、あまり細かいことには口を出さなかったそうである。ただ、野球をしていることに関しては「ほどほどにしておきなさい」といわれたことがあったくらいであった。

### (2) Fさん家族の解散

Fさんの原家族は、現在全員がばらばらに住んでいる。長兄は現在単身赴任で横浜の実家に住む家族から離れ地方都市に住んでおり、次兄は東京で仕事をしつつ千葉県に家族とともに住んでいる。妹は、東京在住の夫と子どもとともに都心に住んでいたが、夫の転勤のため、全員で西日本のある都市に移り住んでいる。

母は母の両親が住んでいた関東地方のはずれにある家に、一人身になってしまった母の妹と二人で住んでいる。母は長兄一家と一緒に住むことを最初から考えておらず、また、Fさんにもあまり負担をかけたくないという気持ちもあり、自分の妹から誘われるままに一緒に住み始めたそうである。

Fさんにとって戻るべき実家もなく、故郷もない状態になってしまった。

### (3) Fさんの家族

Fさんも、Aさんから話を聞いたときには結婚をしているのか、離婚をしているのかよく分からなかった。子どもがいることだけは聞いていたのであるが、結婚については、離婚をしているかもしれない

いので、Fさん自身が語りだすまで、特に聞かなかった。

Fさんは結婚をしていて、二人の子どもがいた。また、奥さんとの同居は、同棲していた2年間が一番長く、入籍してから一緒に住んでいる期間は短い。単身赴任のような、通い婚のような家族生活が続いている。これは、最初から意図したことではなく、たまたま試行錯誤をしている間にそうなったそうである。

Aさんの夫婦は共働きであるが、Aさんの出張のとき以外はほとんど二人でいる。Fさんによれば、Aさん夫婦に子どもがいなかったからそうである。Fさんの家族は、子育ても含め、奥さんの実家にしてもらいながらでないと、二人の仕事を続けることは不可能であった。また、都心で子育てをすることに奥さんが不安を感じており、その点でも好都合で

あった。

不和も無く、ゆっくりとした家族生活を営めるのは、この生活スタイルであるとFさん（と奥さん）は考えているようである。

Fさんの著作を、奥さんが編集をし、出版社への売り込みをしていた。

### 3. おわりに

Fさんとのインタビューは8回を数え、多くの話をきいた。インタビューの報告書を読み、Fさんは「こんな人生を歩いていたのか」と語ったことが印象的である。

Fさんはカナダ留学の時に、自分の人生についてふり返っている。しかし、筆者がインタビューをして再構成した「自分史」を読み別の感想を持ったそうである。

## 文 献

- 堀池依子（1993）一人前への通過儀礼③はずれもの精神科医の場合－異次元の世界への冒険．別冊宝島184，206－211.
- 小森康永・野口裕二・野村直樹（1999）ナラティブ・セラピーの世界へ．小森康永・野口裕二・野村直樹（編）ナラティブ・セラピーの世界．日本評論社（東京）．3－13.
- 杉原俊二（2002）自分史分析の研究（Ⅲ）－なぜ医師をやめようと思ったのか．人間科学，4，2－7.
- 杉原俊二（2003）自分史分析の研究（Ⅵ）－なぜその職業を選んだのか．人間科学，8，7－12.
- 杉原俊二（2005a）自分史分析の研究（ⅩⅢ）－TMさんの大学入学．UNITED（日本人間科学会設立準備委員会会報），6，2－7.
- 杉原俊二（2005b）自分史分析の一考察（Ⅰ）－ナラティブアプローチへの手掛り－．吉備国際大学社会福祉学部研究紀要，10，81－90.
- 杉原俊二（2005c）自分史分析に関する一考察（Ⅱ）－生き方を変えるきっかけ－．吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要，6，49－58.
- 杉原俊二（2005d）自分史分析の研究（ⅩⅣ）－TMさんの大学時代．UNITED（日本人間科学会設立準備委員会会報），7，2－7.
- 杉原俊二（2005e）自分史分析の研究（ⅩⅤ）－TMさんの医学部時代．UNITED（日本人間科学会設立準備委員会会報），8，2－7.
- 杉原俊二（2005f）対人援助とKJ法．人間科学研究，2，1－10.
- 杉原俊二（2005g）対人援助学と自分史分析．人間科学研究，2，11－20.
- 杉原俊二（2005h）自分史分析の研究（ⅩⅥ）－TMさんの医師修業．UNITED（日本人間科学会設立準備委員会会報），9，2－7.

- 杉原俊二（2005i）自分史分析の研究（XⅦ）－TMさんの幼少期．UNITED（日本人間科学会設立準備委員会会報），10，2－7．
- 杉原俊二（2005j）自分史分析の研究（XⅧ）－TMさんの中学・高校時代．UNITED（日本人間科学会設立準備委員会会報），11，2－7．
- 杉原俊二（2006a）自分史分析の研究（XⅨ）－TMさんの．UNITED（日本人間科学会設立準備委員会会報），12，2－7．
- 杉原俊二（2006b）自分史分析の研究（XX）．UNITED（日本人間科学会設立準備委員会会報），13，2－7
- 渡辺康磨（1990）セルフ・カウンセリング．ミネルヴァ書房（京都）．
- 渡辺康磨（1996）セルフ・カウンセリングの方法．日本実業出版社（東京）．
- White, M. & Epston, D. (1990) Narrative Means to Therapeutic Ends. W. W. Norton, New York. (ホワイト．M、エプストン．D『物語としての家族』小森康永訳、金剛出版、1992)
- White, M. (1995) Re-Authoring Lives : Interviews & Essays. Dulwich Centre Publications, South Australia. (ホワイト．M『人生の再著述－マイケル、ナラティブ・セラピーを語る』小森康永・土岐篤史訳、ヘルスワーク協会、2000)